



丹頂鶴が好き

心あったかニュース

北海道の釧路湿原の周辺で工事が進むメガソーラー発電の大規模工事に対し、北海道は必要な知事の許可を得ないまま開発が進められていたとして、事業者に対し2日、工事の中止を勧告しました。森林法では、土地の広さが0.5ヘクタールを超える場合は、知事に開発許可を申請することが定められています。道と釧路市が8月に現地調査を行ったところ、開発面積が知事の許可が必要な0.8ヘクタール余りに上ることが分かったということです。林野庁は、全国の森林で太陽光発電施設の開発が相次ぐ中、3年前に法令を改正し、開発の要件を厳格化しています。NHKオンラインより)

この問題は、モデルの富永愛さんが、Xに「なんで貴重な生態系のある釧路湿原にメガソーラー建設しなきゃならないのか」と投稿し、登山家の野口健さんが、反応して、多くの人が知ることとなり、インターネットでの署名活動となり、大きな動きとなりました。私も丹頂を撮影に

行った時、湿原の近くに黒い塊を見て、心が痛みました。今は北海道東部での生息ですが、江戸時代までは北海道全域で繁殖し、冬にはその一部が東北地方や関東地方の干潟や湿原に渡っていたそうです。明治時代に、乱獲や、開発に伴う湿原や干潟の減少によって急速に数を減らし、全く姿が見られなくなっていました。一時、日本では絶滅したと考えられていましたが、1924年に釧路湿原で十数羽が発見されました。丹頂を絶滅から救う大きな力となったのが地域の人たちの自主的な取組でした。サンクチュアリにその名を残している鶴居村の酪農家、故・伊藤良孝さんもその一人でした。1966年の冬、伊藤さんは自分の牧草地に舞い降りたひとつがいの丹頂に家畜の飼料、デントコーンを与え始めました。その後も酪農の傍ら、丹頂への給餌を続けていくと、厳冬期を生き延び、春には繁殖にも成功する丹頂の数が少しずつ増えていったそうです。1987年に日本野鳥の会は、伊藤さんから土地を借り受け、鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリを設立しました。これが、給餌や観察としての場のみならず、北海道での丹頂の生息環境の保全活動の拠点となった。伊藤さんはその後、2000年に81歳で亡くなる

まで、丹頂の保護に力を尽くした。環境省は、丹頂の自然分散を促すために給餌量の削減を始めました。日本野鳥の会は給餌への依存度を下げようと、凍結しない水辺に自然の採食場を17か所整備した他、新規生息地での地域住民の保護活動をサポートしています。何十年かかるかわかりませんが、冬になれば本州でもタンチョウが見られるようになる日を目指して、保護活動が続けていくということです。政府広報オンラインより)現在丹頂は約1800羽まで個体数を回復している。

編集後記

丹頂が暮らす湿原は、数年で回復はできません。失うと簡単に戻せないのが、自然です。人は動物を絶滅もさせられるし、保護もできます。無関心でいなければ、守ることができると思いました。